



クライス戦記Ⅱ

—第1章—

ショウン

第1章 ケントゥリアスの泪

第1章 ケントゥリアスの泪

(1)

ウォーレン大陸は中央に巨大な内海アルタークを有する。その内海と外海をつなぐ通路にあたるユルファス海峡が北東部にある。その海峡を抑えているのが覇道を歩むレーセン王国。10日前の4月5日に南のカリガエ公国を併合して大陸東岸一体を自国領に塗り替えたばかりである。大陸制覇の障害となりうるのがストラウス共和国。アルターク商船団を味方にした今、ミラレス海からと内海アルターク両面からの攻撃が可能となり、レーセン王国の征服活動は有利に進むと見られていた。そのような立場にありながらもレーセン国王ミランは不機嫌であった。

「〔ケントゥリアスの涙〕はまだ見つからないのか？」

「公王邸には存在しませんでした。」バルドスは必死に額の汗を拭う。

「ぬう、あのような国、わざわざ包囲したのはひとえにあれを欲したからだ。手に入らないでどうする。ケントゥリアスを御せるのではないのか？名実ともに覇業を成し遂げるのに必要な品と言っていたではないか。」手に入らないものを欲しがると子供のような駄々を捏ねる主君にバルドスは内心侮蔑の言葉を吐くが、表向きは平身低頭している。

「行方がしれぬ公王子がおります。恐らくは王子がもっておるのかと。もちろん、ただいま捜索中ですので今暫くお待ち下さい。今は待つのも仕事のうちとお思い下さい。」深く頭を下げ、バルドスは王の間を後にする。扉の外に控えていたヴァレスは血色の瞳で主に目配せし柱の影に移動する。従ったバルドスは耳打ちされた内容にほくそ笑む。

「そうか、マイユで網を張ればいいな。それにしても100騎以上の追っ手を切り伏せるとは、さすが守護騎士ホークだ。我が軍にも欲しいものだな。」

「いかな凄腕でも一騎のみ。消耗していないはずがありません。ミラン陛下のご機嫌はいかがでしょう？」

「すこぶる悪い。なんとしてでも手に入れるのだ。」

「今回は私めも向かいます。しばし暇を。」

「うむ、転移してもらえるか。お前がいけば儂も枕を高く出来よう。頼むぞ。」

「御意。私の代わりにサンテが付きます。アルターク商会の手綱、くれぐれも緩めないように。手の内を明かしてしまっては遅いですぞ。」深く頭を下げたヴァレスは数瞬後、その姿を掻き消した。

「ほんとうに役に立つ。一年前のあの姿からは想像出来ないな。」感慨深げに消失した暗がりを見つめ、バルドスは顔を引き締める。

「確かにアルタークの船が勝手に動いている。外海での活動は控えろと言っているのに…… ノルンめ、ほんとうに喰えない老人だ。」

(2)

ウォーレン大陸最南の都市国家ヴァルトとストラウス共和国を結ぶ大陸西部のオストラ街道を駆け抜ける栗毛の馬。駿馬と呼ぶに相応しいその体躯の汗も乾ききっている。かなりの疲労が伺える。手綱を取る騎士はヴァルトとストラウスの国境に差し掛かったところでその馬足を緩

める。国境駐屯地にはヴァルト・ストラウス両国の騎士がいる。入国審査をする事務所前で馬を止めた騎士は警備兵に軽く声を掛ける。

「おつとめご苦労様です。少し馬を休めたいのですが、水を分けてもらえますか？」何気ない言葉にヴァルトの警備兵も快く厩舎を指さす。

「随分な長旅のようですね。どちらから参られたのですか？」

「いやなに、かみさんが産気づいたようで。取るものもとりあえず、坊主と里帰りです。カリガエの辺境からで、もう必死です。」騎士が気さくに答えるや外套ですっぽりと覆われた背後がもぞもぞと動き出した。

「父様、もう降りていい？」いきなりの幼い声に警備兵は呆気にとられる。

「お子様もご一緒でしたか。早く着かれるといいですね。まずは一休みですけど。」人の良さににじみ出る笑顔の警備兵は父親にしがみついていた男の子の手を取る。

「かたじけない。さ、サーフ、降りなさい。」手を借りてヒョイと馬から飛び降りたサーフは警備兵に挨拶もせずさっと駆けだした。

「すいません。礼儀がなくて。」しなやかに馬から降りた騎士は深々と頭を下げ、サーフの頭を小突く。サーフはなぜ小突かれたのか分からずきょとんとしている。

「まあまあ、そんな怒ることはありませんよ。でも、サーフ君、君も騎士になるなら礼法は身につけないとね。」警備兵はサーフの頭を撫で諭す。

「あ、そっか、ありがとうございます、だった。」サーフは改めて警備兵に会釈した。

「そう、それだね。」警備兵の笑顔とは逆に騎士は天を仰ぐ。

「それにしても近頃の東岸の状況は酷いですな。カリガエ公国がレーセンの軍門に下ったって話で持ちきりですよ。」警備兵の何気ない世間話にサーフの表情が曇る。今にも泣き出しそうなその顔を見て、騎士は無言で少年の短い剣の柄を握る。

(何があっても泣かない、そう約束しましたよね。)無言の言葉がサーフの胸に響き、頭を振り、泣きっ面を掻き消す。亜麻色の髪の毛が軽やかに揺れる。

「時に、騎士殿。名前を伺っておりませんでした。よろしいでしょうか？」

「あ、申し遅れました。息子のことを言えませんが。私はホークと申します。」

「ホーク、様ですか。なんか聞き覚えがあるのですが…… う～ん、思い出せません。」

「いえ、有名を轟かす様なものではありませんよ。ストラウスの騎士章です。これで国境を通して頂けますね。それにしてもストラウスの駐屯兵を見かけませんが……」ストラウス騎士が叙勲の際にその左手甲に刻む小さなルーンの刺青をみて警備兵は頷く。

「もちろん、お通り下さい。ストラウスの方々はこの先のマイユ港に連絡船が緊急入港したようで、そちらに狩り出されたようです。」

「連絡船が入港とは…… 焦臭いですな。」深刻な表情を浮かべるホークを見たヴァルト警備兵はふと何かに思い当たったようで目をしばたかせる。ホークはそれに構わず一礼して愛馬を引き、厩舎に向かう。幼いサーフもその後に着いていった。警備兵はそのまま事務所に向かった。手続き申請でもしてくれるのだろう。

(それにしてもこの警備兵以外はいないのか？見た限りでは体のいい使いっ走りだが……)

「父様。僕のほんとうの父様と母様はどうなったの？」人目がない厩舎でサイファは堪えていた感情をホークにぶつける。国元を出て、追っ手を見た時から募っていた不安は的中した。

「泣かなかったサーフは偉い。残念ながらサーフの両親はこの世にいないであろう。」冷静なホークの言葉がサーフに突きささる。幼子に堪えていた涙を止める術はなかった。

「今は泣いていい。だが、哀しみと共に忘れてはならないことがある。」泣き声を挙げることなく静かに涙を流していたサーフはこれまで見せたことがない大人びた表情で頷く。

「ご両親は我が身を挺して貴方をお守りしたのです。このことと、あなたに託されたものの重さと共に忘れなされるな。それと私の気持ちも。最後まで貴方の母君を守れなかった悔しさと貴方を何が何でも守り抜くという使命を！」サイファはホークの顔を凝視して気が付いた。涙こそ見せないが、ホークも泣いていることを。

(ホークがいていたのはこういうことなんだね。僕も強くなれないと……) 父母のもとを離れてから数え切れない追っ手を切り伏せた『守護騎士』から本当の騎士道を学んだサイファは、自らの涙を拭い、ライオットの腹をさすり労をねぎらった。

「ありがとう、ライオット。君のおかげで、もうストラウスに着く。お祖父さまのところに着いたらごちそうを用意してあげるからね。」言葉が分かったのか、ライオットは鼻先を左に向け、サイファの顔に鼻先を押しつけた。

「言葉が分かるんだね。友達だ。」サイファの顔がほころぶと同時に、彼の胸元から目映い光が溢れ出した。優しい乳白色の色がライオットを包み込む。ライオットは怯えることなく穏やかな瞳を浮かべ馬草をはんでいる。驚いたのはサイファとホークである。

「サーフ、お前、今何をした？」

「え、分からないよ。でもライオットを回復させたいなって思ったら光ったんだよ。」サーフは嘘をつかない子供であることは誰よりも知っている。

(だとしたら、あれか。)ホークはサーフに託されたものの所在を確認する。

「お前の胸元に、あれ、下げているのか。」

「はい、無くしたらいけないからって母様が首から提げてくれたの。でもこれ時々光るんだよ。なんでだろう。ライオット、この光浴びて大丈夫かな？」心配そうな表情でライオットの腹をさするサーフ。ホークは愛馬の瞳をみて確信した。

(ばりばりに回復していやがる。なんてこった～、俺も浴びたかったぜ～)

「さて、ライオットもいい顔になったようだし。一気にストラウスに入るぞ。」

「大丈夫なのかな？でも早くお祖父さまに会いたいな。」サイファの表情が輝く。

「よし、決まりだ。」

「うん、それは賛成だけど……ねえ、父様、サーフはおなかが減りすぎです。断食の修行はまだ続けるのですか？。ストラウスに入ったら夕飯、食べられるかな？」

「……マイユでストラウスの騎士に出会えたらな。」一昨日の追撃部隊と斬り結んだ際、路銀の入った袋を切り裂かれた後、わずかな小銭で買った饅頭を食べてから何も摂取していない。二人の腹が空腹を訴えて同時に鳴る。

「父様、早く出発しましょう。」

「そうだな！何が何でも飯を食おう。」

「ブルヒィーン」一頭、満足げにライオットが嘶き、二人は馬上の人となった。

「あれ、もう行っちゃったのかな？どうしよう、これ。」人の善いヴァルト警備兵は暖めたスプを持って二人を訪ねたが、厩舎はもぬけの空であった。彼の背後にけたたましい馬蹄の音が響き、黒ずくめの騎馬が10騎迫ってきた。静かに食器を置き、のんきに振り返った彼に先頭の騎士が問いかける。

「すまぬが、人尋ねだ。栗毛の馬に乗った親子連れ、ここを通ったか？」殺気だった気配に臆することなく、警備兵はなけなしの勇気を振り絞り、職務を遂行しようとする。

「あの方々、何かしでかしたのでしょうか？確かにここを通りました。ですが、たった今いなくなっただです。おそらく国境を越えたのでしょうか。騎士章もありましたし。ところで、あなた方も国境を越えるのですか？」

「当然だ。文句があるか？」

「………通行の証をお見せ下さい。所属の分からない方々を通したとあっては責任問題になります。」

「なにをいうか！この一大事に！」背後にいる騎士が殺気を剥き出しにする。

「待て、ここで問題を起こしてどうする。」先頭の騎士が冷静に窘め、胸に下げた五角形の騎士章を見せる。

「これは、レーセン王国の騎章！分かりました。お通り下さい。一つ教えてください。」

「なんだ！」いきり立つ騎士たち。

「あの親子は何者なんです？」

「そんなこと教えられるか！」言い捨てた後、警備兵を蹴り倒した黒い騎団はストラウス領内へ駆けだしていた。

「ててて。乱暴だな。レーセンの騎士、評判どおりだな。それにしても彼らを追っていたってことは………」

土埃を払い立ち上がった警備兵はふと思いついた。

「ホーク！そうか、守護騎士のホークか。カリガエに駆け落ちした巫女の守護騎士！じゃ、あの坊主は？サーフってのは……聞いたことないな。ホークが守護につくなら偽名だろうな！」伝説となっている騎士と言葉を交わし感動した警備兵の名はヨーン。親子が追われていることを心配したが、それも不要のようだ。彼があ守護騎士なら心配は無用。むしろあの騎団の方がただでは済まない。興奮さめやらぬヨーンはその場に警備兵の上衣を脱ぎ捨て、本来の軽装に早変わりしその場から姿を消した。もとよりこの国境の入国審査事務所に彼は所属していなかった。

(3)

マイユの町は珍しく賑わっていた。緊急避難入港した連絡船から下船した人々が少なからずいたから。乗客の多くは商人達でよほどの物好きでない限り一文の得にもならない物見遊山はしない。乗り合わせていた騎士や芸人、文化人は船内でじっとしていることが出来ず、漁師町の裏手に集った。数軒の飲食店が連なっていて、普段はそこそこの客しかいないが、今日は席に余裕がないほどだ。吟遊詩人は酒場の店主と交渉して優雅な弦楽器バイラの音色に載せ、アーレーン大陸のウィンドゥアル物語を披露しはじめた。各地で人気のこの物語。この地域ではまだ知られておらず、地元の漁師達も集まり、いつもより余分にシリン銀貨を払い物語に聞きいつている。

ショウンとともに下船した青年はたまたまこの酒場に居合わせていた。

「ねえ、師匠。このお話……こそばゆいですね。」アルコールを飲んだわけでもないのだが、顔が真っ赤なショウンは青年に照れくさそうな視線を送る。相槌を求められた青年はワインを口にしていたが、ショウンと同じで酔いとは違う顔の火照りを覚える。

「そういうことは言うんじゃないの。でも、美化しすぎだよ。君のことも僕のこと。」

「そうですよね。いつから僕はクイントゥス(小旋風)になったんですか。」

「そうだね。こういう派手な呼称はランスに付ければいいのに。まあ、〔英雄〕以上の派手な呼称はないか僕なんか空を舞う美貌の騎士だよ。ウィンドゥアルだって重いのに……なんとかならんのかね。お代わり！」珍しく杯を重ねる青年にショウンは眉をひそめる。視線に気付いた青年はいい訳を始める。

「久々に上陸して嬉しいんだよ。それに酒を引き立てる魚料理が出ているのだから仕方ない。ショウンもやったらどうだい。もう飲んでもいい歳なんだし。付き合ってくれてもいいだろ？……」わざとらしく肩を落とし上目遣いにショウンを見る青年。

「酔っているんですね……バーム様の酔いっぷりを見ていると酒に浮かれるのが馬鹿みたいに思えます。」

「またまたお子様なこと言うんだね～、ショウン君は！だから飲まないの？飲まれた振りしてるだけじゃないの、親父さんは。ショウンも宮廷の連中といずれ付き合うんだしさ、飲まれない訓練してもいいだろ、なっ！」言いつつショウンの肩をぽんぽん叩く。

「もっともらしい理由を付けて！師匠はだんだんリッツ様やバーム様に似てきましたよ。」

「ふう～ん、どんなところが？」にやにやしなながら自分のグラスをショウンに押しつける。ショウンもそのグラスを取ろうとしたが、それは実現しなかった。店の外が騒がしい。馬蹄の音がいくつも聞こえる。極めつけは剣戟の音。いきなり酔いが抜けた青年はショウンに右目をつむり、「残念～、お預けになっちゃったね。さ、行こう！」と細身の長剣を手に取り、風の如く店外に飛び出した。

(ほら、やっぱり同じじゃないか。酔ってないんですね。)頭をかきながらショウンも大剣をひょいと担ぎ、青年の後を追った。

「父様、追いつかれちゃったね。」心配など微塵も見せないサーフ。これまでの追っ手を払いのけてきた実績を信頼をしてか、はたまた暢気なのかは分からない。おびえないのは助かるが、これはこれで問題がある。

「ああ、そうだな。盛り場の手前でケリをつけてやらないとな。」

(くっそ～、腹減ったぞ～)断食修行と言った手前がある。矢が届く距離になった時、ホークは一気に殲滅しようとライオットを制し、さっと飛び降りる。着地と同時に鞍に下げた弓を取り、神速で矢をつがえ三射立て続けに放つ。果たして矢は先頭を駆ける三騎の騎士の胸甲を貫く。牽制としては十分すぎる成果は想定のうち。後続に怯みが見えたところでさらに射たいところだが、もう矢がない。弓を鞍に戻し、両腰に下げられた二振りの剣を静かに抜く。

「ライオット、サーフを頼む。いざとなったら駆け出せ。」

「ヒン！」短く啼く声に安心してホークは迫る敵に歩み出した。騎乗の七人は前衛三人が槍を

構え、後衛四人が剣を抜きはなち、豪声とともにホークに向けて突進した。迎えるホークは歩みを速め、数瞬後に駆けていた。その動きは狩りをする獅子のごとくしなやかであった。駆けつけた青年とショウンは取り巻く群衆を掻き分け、前面にでて、その姿を見た。

「加勢も必要ないね。しばらく見ていよう。勉強になるだろう？ショウン。」

「ええ、ランサー様に近い動きですね。もう槍を叩き折りましたね。」

その勢いで跳躍したホークは軽く跳躍するや、一番槍の騎士の頭上を飛び越え、背後から迫る騎士の斬撃を左の剣で流し、右の剣で胸甲もろとも袈裟懸けに切り裂いた。血しぶきを上げて騎士が地面に倒れた段階で、馬はホークの御すものとなる。両手の剣はそのままで両膝で馬を見事に制するその技に追っ手は度肝を抜かれる。

「あ、あんな凄いことしている。バーム様だって滅多にやらないことを……」ショウンは瞬時に三騎の剣撃をかわし確実に相手に止めを刺すホークの動きに感心していた。気がつくやと青年が脇から消えていた。

「あ、あの男の子。」一瞬遅れてショウンも子供を乗せた駿馬に駈け寄った。折られた槍を棄て、剣を抜いた騎士たちはホークを顧みず子供に駈け寄った。

「あの子供を捕らえよ。」命令系統がはっきりしている兵達で、確実に捕捉するため三方に分かれライオットに駈け寄る。危機を察したライオットはかけ出そうとした。その瞬間、鞍にふわりと跨った青年にサーフはビックリしたのか声も出せずに見とれていた。

「驚かせて御免ね。でも、君を守るつもりだから心配しないでね。」優しい笑顔で馬を竿だたせた青年は迫り来る三騎に馬首を巡らせ、駆けだした。

「誰だ、ライオットに乗れたのは！あいつめ、結構尻軽だったんだな……」ホークは奪った馬上で安堵の息を吐き、ライオットを御す青年の動きを捉える。油断は出来ないが、彼の騎士の勘が敵でないと警告している。その青年は剣も抜かず敵に向かっている。

「どうする？」興味津々のホーク。

「君、いい子だね。行くよ！」ライオットに囁くや、サーフを抱え込んだ状態で手綱を強く上に跳ね上げる。同時にライオットの前肢が高らかにあがり、後ろ足の踏み込みの力を受けて宙に駆け上がる。仰天した前方の騎士は顔面にライオットの右前肢の蹴りを受け落馬した。その馬を飛び越え、着地したライオットはいななきをあげ、馬主を巡らす。一瞬ホークと目が合った青年は右目を瞑って笑顔を向けた。

「なんてえデタラメな馬術！！あいつ、跳ぶのは苦手だったはずなのに……」呆気に取られつつも剣を構えて左側の騎士に向かう。

「サーフ、そのお兄さんの邪魔しちゃ駄目だぞ！」

「うん、分かってるよ、父様。」どこまでも素直なサーフはむしろ楽しんでいる様子。青年はライオットの歩みを止め、大声を上げる。

「ショウン、君の出番だ！」

「お任せ下さい！」赤光がホークの操る馬の前を擦り抜け、近づいてくる一騎に大剣を一閃する。刃身から発せられた光の刃が、過たず馬上の騎士を切り裂いた。

「やるなあ、少年！」ホークの右手の剣が一閃。追撃手の手綱は切れ、頭から落馬。10人の追っ

手はすべて絶命した。事態が收拾した段になって、港にいたストラウスの騎士5人が駆けつけてきた。

「遅いって。」ホークは端正な顔を顰めて頭を掻いた。

「この私闘は何事だ！」ストラウス国境警備騎士の怒鳴り声が響く。厄介ごとに関わりたくないし、滅多にみられない騎士の戦いぶりに満足した町衆はそそくさと退散しはじめた。

「こいつらをやったのは誰だ！」

「俺だ。」ホークは馬から降り、名乗りを上げる。

「僕たちもです。」サーフの手を引いて近づいてきた青年と少年も悪びれず名乗る。

「いやいや、こちらの方達は関係ない。助けてくれたただけだ。」

「そうはいつでも、2騎を片づけたのは僕たちですよ。」二人が譲らずにいるうちに騎士たちは死体を片づけ始めている。

「そんなことはどうでもいい。お前達も片付けを手伝え！その後で全員来てもらうぞ！」若い指揮官は苛立ちを隠さず命令した。

「ああ、そうだな。礼をかいた。兄さん達は本当に関わりないんだ！帰ってもらっても構わないだろう？ブレアス。」ホークは頭を下げ、自らが作った遺体に歩みよった。予期せず名前を呼ばれた指揮官は士官したての頃の記憶を甦らせた。

「ホーク様ですか？」背後からかけられた声に左手を挙げて頷いたホーク。ブレアスは堪らずかけ寄った。

「8年ぶりです。よもや先輩にこんな形で再会出来るとは！」

「ああ、俺もこんな形で帰国するとは思わなかったぜ。お前らがもっと早く駆けつけてくれたらこんな騒ぎにならなかったのによ！」

「すみません。連絡船の方の状況報告を受けていたので。」

「まあ、お前に文句を言っても仕方ないよな。事情は後で話す。さっさと葬ってやろう。」

「あの死体の山は？」

「おそらくレーセンの騎士だ。これで107騎潰したことになるな。」

「流石というか……レーセンの追っ手がここまで。もしかしてあの子供は……」

「そう。お前の想像通りだ。それよりもお前、あの二人が何者か知っているか？」

「知るわけないですよ。見慣れない服装だし、連絡船の乗客じゃないですかね。」

「そりゃ恐い奴らを連れてきたな。あの太剣背負ってる少年、赤光まとして〔ストライド〕を使いやがった。お前、出来ないだろ！」

「え、うそ！」ブレアスは振り返り、立ちつくしている少年を見た。視線に気付いた少年はぺこりと頭を下げている。

「おまけに公子を肩車してる色男は底が知れない。レーセンの追っ手じゃなくて助かったぜ！」

」ホークの讃辞を聞いたブレアスのははっとする。

「実は不思議な話があるんです。連絡船、砲撃を受けたそうなんです。」

「海で砲撃を受けたのか？」

「まあ、聞いてください。そうなんです。被弾した応急処置でここに入港したわけです。船員はなんで逃げられたのか語ろうとしないんですが、乗客が言うには、奇跡が起きたっていうんです

よね。」

「どんな奇跡だ？」

「巨大な剣が2度目の砲撃を防ぎ、暴風が吹いたと……その奇跡を起こしたのは長身の色男だと聞いたもので。」言っている自分でも信じられないことだが、証言した乗客はみな真顔だった。ホークは数瞬の沈黙の後、静かに答えた。

「そっか、それじゃあの兄さんだ。間違いない。ま、その件はお前の胸にとどめといてくれな
いか？」

「いや、船員の証言もないことですし。先輩がいうなら……それにしても何者でしょうか？」

「去年、アーレーンで一大事があったって聞いているだろ？」

「ええ。なんでも風を解放したっていう話ですよ。あと蒼竜を退治した風の騎神ウィンドウアルの噂も。でもホントなんですかね？あ、先輩のことは別ですからね。信じられないことをこの目で見ただから……」

「そういうことだ。間違いない！」

「え、なんですか？分からないですよ。」

「まあ、いってことよ。それにしても遺体って重いな。」

「命は重いんですよ……」

「ホントにな。」

彼らが最後の遺体を運び終えた頃には完全に日も暮れていた。茶毘にふす時まで遺体に近づくものはいないはずと警備兵も配されなかった。その場所に黒衣をまとった長身の男が忽然と顕れる。

「まことにあっけなくやられたな。守護騎士とはよくいったものだ。あとから加わった二人もただ者ではない。貴重な〔竜牙〕だが、ここで〔泪〕を手にしておかなければならない。あの小僧を主と認める前に……」男は懐から革袋を取り出し、封を切って中から中指よりも長い象牙の杭のようなものを摘み出した。その杭をすべての遺体の胸に突き立ててから男は目を瞑りルーンを唱えた。左手を杭の上に翳した時、紫の光がほとぼしり、その勢いで杭が胸の中に静かに入り込んで行った。すべての遺体に処置を終えた後、男は乳白色の光を全身に纏いルーンを唱えた。いつの間にか右手に握られた細身の長剣もすべて乳白色になった後、その剣先を遺体の心臓の位置に一体一体突き立てていった。血が出るどころか、蘇生が始まった。酷く消耗した男はフードを取り、額の汗をぬぐいさる。

「貴様ら、光栄に思うが良い。生を再び得ることが出来たのだ。脆弱なユムスの意識を棄て、ラグンと化して力を解き放つがよい。日の出により、汝らの呪縛は解かれん。しばし、休息を取るがよい。我が下部達よ。」言い終えた男、ヴァレスは再び宵闇の中に消えていった。

(4)

ストラウスの騎士に案内されたユムスの庁舎の一室でホークを待つ間、旅の師弟はこのこされたサーフの相手をしていた。青年はサーフにすっかり気に入られたようで、せがまれた末、名前を明かした。サーフはシェフィールという青年の名前が長すぎてシェールとしか言えない。これに大人二人は笑い出した。

「いいよ。サーフ君。シェールで。」シェフィールが久々に見せる快心の笑顔にサーフはすっか

り上機嫌で、シェール、シェールと連呼している。シェフィールもショウンも共通の人物を思い出していた。

「ねえ、シェールのおじちゃん。おじちゃんは騎士なの？その長いのは剣だよね。」無邪気な笑顔のサーフ。シェフィールはその言葉に絶句。

「…………おじちゃん……………」額に手を当て目を瞑る師匠をみてショウンは忍び笑いをしている。思えばシェフィールにこんな仕草をさせることが出来るのはバーム父娘ぐらいであった。(う～ん、ここはきちんと言いきかせた方が！)決意したシェフィールはサーフの頭に優しく手をのせて言いきかせた。

「先程、お父様もおっしゃられたのですが、お兄さんだよね。僕は！」

「だって、父様とあんまり変わらないよ？お兄さんと呼ぶ方が失礼かなって思うんだけど、どうかな？ショウンお兄ちゃんはお兄ちゃんでもいいかなって思うけど……」撫でる優しい手は受け入れられたが、あどけない笑顔の前に言葉は無力であった。堪えきれなくなったショウンは爆笑しながらサーフの言葉を肯定した。

「サーフ君は間違っていないよ。僕たちに気を遣って呼び方を考えてくれたんだね。師匠、まさか、お兄さんじゃなきゃ駄目なんて言わないですよ。」笑みを浮かべたショウンに恨みがましい視線を向けるシェフィール。これまた滅多にみせない不満顔になる。

「もちろん……おじちゃんだよね。そうだよ……」

「ああ、よかった。間違ってたなかったんだね。父様から失礼なことだけは言っはいけないって言われていたから。」

「全然失礼じゃないよ。うん、失礼じゃない。サーフ君も騎士になるの？」笑いを納めきれないショウンはサーフが腰に下げた小振りの木剣に目を向ける。

「うん。父様に稽古をつけてもらえるようになったから。父様、強いんだよ。」誇らしげに語るサーフに年長者二人も同意して頷いた。

「あ、お兄ちゃん達も強かったよね。特にお兄ちゃん、赤く光っていたよね。かっこよかったよ。僕もあんな風になれるかな？僕、緑が好きなんだけどな。」

「そうか。一生懸命稽古すれば必ずなれるよ。色はその人そのものなんだよ。成長すれば色も変わるしね…………。だから、サーフ君の色を出せるようにね。君のお父様も素晴らしい色を持っているんだよ。見たことない？」シェフィールの何気ない言葉にサーフよりもショウンの方が興味津々であった。同じことを尋ねた時は、知らないよって笑っていたのだから。

「そっか。頑張っって強い騎士になるね！おじちゃんは濃い青色だよね。父様と同じなんだもん。」

「そうだね。やっぱり分かっていたね！いい子だ。感じる事が出来るんだから、いずれ自分の色も分かるよ。」

「うん。」子供と大人の何気ない会話？を耳にした少年は複雑な顔をする。

「師匠、サーフ君に色、見せてないですよ。」

「もちろん。でも分かるんだよ。ショウン、これで分かるだろう？」

「??？」いつもの教えないレクチャーに首をかしげるショウン。

「君もそのうちに分かるよ。ね、サーフ君。」満足そうに相槌を求めるシェフィール。

「??？」同意に答えられないサーフ。

微妙な空気が漂う部屋にホークが入ってきた。

「いや、すまん。助けてもらったばかりか、子供の面倒まで見てもらっちゃって。ささやかな感謝の印として一緒に食事に行こう。夕飯、まだだろ？」

「父様、断食修行終わりだね。もうホントにぺこぺこだよ。」

「断食修行……ですか……」シェフィールの声に微妙な呆れが混ざっている。ホークは言葉もなく頭の後ろをかいている。サーフはいたって嬉しそうににこにこしている。

「それじゃ、ごちそうになりましょう。師匠。」

「お前、さっき飲まないで食べてばかりいたのに……」

「おじちゃんと違って少年は育ち盛りですから。」二人のやりとりをみてホークも破顔する。

「まあ、お互い腹が減っているようだから、とにかく食おう。実は俺ももう限界なんだ。」

「そうですね。私も飲み直したいところでしたので。久々に一緒に飲める相手も出来たことですし。」

(5)

シェフィールは自分たちの宿にホーク親子を案内し、下の階で食事を取り始めた。ホークが金貨を余分に女将に渡したため運ばれてきた料理は豪勢なものとなった。近海であがったばかりの生魚の白い刺身、二枚貝焼き物、海草と山菜のサラダ、煮魚、焼き魚。何よりも嬉しいのがこの大陸でのみとれる米の炊き込み。香辛料と香草、魚介類を煮込んだこの炊き込みはサライルと呼ばれ、各宿ごとに独自の味付けがされている。シェフィールとショウンははじめて見る食べ物の絶妙の風味と味を堪能している。その一方でホーク親子は口中を脹らまし頬張っている。噛んで咀嚼しているのか微妙な勢いである。次々と出てくる料理を次々と処理している。シェフィールは食べる手を止めてその食欲魔人と化した親子を眺める。

(これでもおつりが来ると女将は言うけど、心のこもった料理、もっと味わってもいいのに……
・ま、残す失礼はないかな。)

「父様、サーフはもうおなかに入れられません。」大半を空にしたが、まだ半分以上残っている皿がある。

「のこしちゃ駄目だぞ。食べ物には感謝の心を！だぞ。また野菜をのこしてる！」

「はい、父様。でもニンジンだけは許して！」懸命に野菜の煮物を片づけ始めたサーフにホークはだ一めと釘を刺す。その目はいたって優しい。

「父様の意地悪……」肩を落としつつも左手に握った箸をニンジンに突き刺す。

「ニンジンだね、甘くておいしいよ。栄養も凄くあるんだ。根の野菜はちゃんととらないと大きくなれないよ。」シェフィールが優しく諭すとサーフはコクンと頷いてニンジンを二つに割り、食べ始めた。というよりは呑み込んだという方が正確だが。

「おお、食べられるじゃないか。今度はピーマンとセロリだな。必ず食べるんだぞ。」ホークが意地悪い笑顔を浮かべるのを無視して野菜を食べ続けた。からかうつもりが拒絶されたホークはつまらなそうに杯を煽る。当然目の前の大皿をすべて平らげている。すっかり夜も更け、食欲を

満たしたホークはサーフを寝かしつけ、シェフィールと自称大人のショウンと会話を始める。

「おい、大人なんだろう。当然、酒に付き合ってくれなくっちゃな。」と有無を言わずグラスに葡萄酒を注ぎ込む。ショウンは顔を引きつらせ、シェフィールは腹を抱えて笑い出している。

「それでは、偶然の出会いに乾杯！」グラスを突き合わせ一気に飲み干した二人の視線が自称大人に注がれる。ショウンはごくりと息を呑み、自らの発する赤よりさらに濃い液体を口に入れた。みるみる顔に朱が差す。目がトロンとしはじめたショウンは、思いの外味が気にいったようでグラスを再び口に運ぶ。

「よし、これで仲間入りだ。」満足したホークがショウンの背中をばんばん叩く。

「意外とうまいだろ。麦酒と違って苦みも少ないし。」シェフィールも嬉しそうにグラスを傾ける。

「……そうえすね。でも胸元と頭がカアっとしてくうんれすね。」と発音が怪しいショウンに大人二人は吹き出しそうになるのを懸命に堪えた。

「さて、これで一心地ついた。先刻の礼もまだだった。助かったよ。シェフィール殿、ショウン殿。」ホークは深々と頭を下げる。

「そんな。多勢に無勢でしたし。何よりも子供がいるのに襲いかかる方を許せる訳がないですよ。加勢するまでもなかったのですが、ちょうどショウン君も長い船旅でうでがなまっていたから。」

「そうって頂けるとかたじけない……」

「立ち入った事を聞くのもなんですが、あの追っ手は何者だったのでしょうか。事情を話して頂ければ、助力もできます。でも守護騎士ホーク殿ならたいがいの問題でもお一人で切り抜かれるでしょうけど……」シェフィールの何気ない言葉にホークは一気に酔いが覚めた顔になる。

「そうですか、守護騎士と言われるとは思いませんでした。ならばウィンドゥアル殿とクイントゥス殿とこちらも呼ばせてもらいます。」本来の騎士の顔に戻り精悍さが増すホーク。シェフィールもショウンも呆気に取られた顔になる。

「これは驚きました。何で分かったんですか？風は使わなかったのに……」

「クイントゥスなんて呼ばえうと照えますね、ひひょ〜。」顔を赤くしたショウンはシェフィールのグラスに葡萄酒を注ぎ、自分のグラスにもなみなみと注いだ。酔っぱらいになったショウンはこの懇親会から外れる事になる。

（こいつ、飲んべえになるな。明日の朝が楽しみだ♪）

「まあ、昔の仲間から連絡船での経緯を聞けば、何となくね。で、西の大陸の雄が東の大陸に上陸した真意は？」ストレートな問を投げかけた後ホークも杯を重ねる。真正面から受け止めたシェフィールも再びグラスを空け、口を開く。呑むほどに互いの胸襟が開かれるのが分かる。お互い対等な力を持つ相手とこのように和やかに話す機会などこれまでなかった。それも手伝ってかお互い驚くほど意気投合している。このような感情をなんと呼ぶのか、不幸なことに彼らは知らなかった。

「西と同じ事が東でも起こりそうな気配なんだ……人や国家の争いに首を突っ込もうとは思わないけど、奴らが動いたなら阻止する。」力強いシェフィールの言葉にホークはごくりと息を呑む音が静かな部屋に響く。ホークは額の汗を拭い、シェフィールの言葉の意味を考えた。

「奴らって？」

「人ならざるものの存在を見た事は？」質問というよりも確認しながらシェフィールは空になったグラスになみなみとワインを注ぐ。

「……つまり、人外の力が働いて争乱が起こりそうだっていうのか。俺が知るのはラグンぐらいかな。だが、ケントゥリアスは害をなすような存在ではない。むしろ力を……」

「ラグンではありません。たしかにケントゥリアスは敵ではない。」

「??その言いぶりだと、見たのか……？」傾けていたグラスをテーブルに置く。その顔は素面に戻っていた。

「いや、見ていないよ。でも気配は感じた。風も教えてくれた。」

「そうか、ありえるな。あんたなら……」再びグラスを持ち上げて飲み干すホーク。

「本題にもどるが、ラグン以外の存在なんて知らないぜ。」

「だよな。我が主君ランサーの名で各国主へ警告文を発してあるはずだが、おいそれとは公表されないだろうし。」

「なんだ、そりゃ？」

「いや、今は言っても信じてもらえないだろうから、ね。時が来たら。あなたとサーフなら彼らの方が放っておかないはず。ね、ホーク。一つ頼みがあるんだが。」

「なんだ？」

「俺たちを客分として雇ってくれないだろうか？」

「嬉しい話だけど、金がないんだ。」

「金は持っている。必要ならこちらが出してもいい。」

「なんだ、そりゃ」真剣なシェフィールの瞳を見ると笑おうにも笑えない。

「信じて欲しいなんていっても今日出会ったばかりだしね……」

「まあ、こうして酒を飲んで腹を割っているんだから、信じたいね。俺の直感から行くと敵じゃないし。おまけに断っても付いてきそうな感じだしな。」ホークはやっと笑顔を浮かべる事が出来、残ったワインを二人のグラスに注ぎ、一方的に飲み干した。

「お互い、今日の出会いに感謝ということで……」シェフィールは右目をいたづらっぽく瞑り、同じくグラスを干した。

「ところで、お前、いくつだ。結婚はしているのか？」主となったホークは世俗の話題をふっかける。

「24です。妻帯はしていないけど……」

「想い想われる相手がいるってか。24か。若いな。俺は29だ。同じく妻帯はしていない。」

「??じゃ、サーフは一体？」珍しくシェフィールの目が見開かれる。ホークは目を伏せてしばらくの沈黙をもって答えた。

「俺の主君だ。追っ手を逃れるために親子を演じているが。専ら教育係になっている。」

「そう。気付かなかったよ。まだあるみたいだね？」

「隠せないな。主にして最愛の女性の忘れ形見ってところだ。何をおいても守り抜くと約束した。」

「そっか。気品といい、王族だね。それだけじゃない。彼はすごい力を秘めている。」

「騎士として、見込みはある。それ以外は俺には分からん。」

「そのうち分かるんじゃない？……ありがとう。信用してくれて」

「なんていうか、こう、誰かに聞いて欲しかったんだ。こちらこそありがとう。それにしても酒が切れたな。もらってこよう。この後はウィンドゥアル殿の話を知りたいな。」そそくさと部屋を出て下の酒場に向かった。首筋がほんのり赤くなっているのは秘めていた想いを明かしたからなのだろうか。夜半まで呑んで酔いつぶれた彼らの寝顔は笑顔になっていた。

(6)

陽が昇り始めてマイユの町は騒然となる。駐屯地から凶獣の叫び声が響き渡る。

「なんで、いきなり竜が……おまけに群れででてくるなんて聞いた事ないぞ！」駐留中のストラウス騎士を指揮するブレアス。突然兵舎から出現した凶獣の群れに吐き捨てる。まだ動きが緩慢で苦しそうに呻いている声聞こえる。ブレアス率いる20人の騎士ではその生き物一体倒せば殊勲ものである。ストラウスではほとんど現れない亜竜。それが複数いるようだ。

「カーフ。夕べ騒ぎを起こした騎士を呼んできてくれ。急げ！」

「は！しかし、いかに強い騎士でも……」

「あの方は竜などものともしない！急げ！」かけ出す騎士見習いを背にブレアスは長槍を構えた兵に亜竜牽制を命じる。遅れて来た長弓装備兵に弓をつがえさせると自ら先頭に立ち、様子を眺める。対峙の時間がしばらく続いた後、先に出てきた二頭の竜が自らの長大な翼を拡げだした。長い首を伸ばし全身から吐き出すように咆哮を始めた。吐き出した口中から炎がちらつく。

「炎息が吐き出される前に翼を封じておかなければ。弓を射よ。一本でも多く羽に当てろ。胴体は狙うな！無駄になる。」任官なったばかりの新兵の体がふるえている。

「いいか！牽制すればいいんだ。呼吸を整えろ！3・2・1……」弓が引き絞られる音が重苦しくのし掛かる。

「てい！」ブレアスの声とともに数本の剛矢がうなりをあげて亜竜に向かう。数本が先頭にいた亜竜の翼を射抜いた！痛覚から亜竜は首を振り回し悲鳴を上げる。息の後に続く炎の剣が長くなっている。

「前面の炎に気をつけろ！炎の剣が来たら後退！次の矢を放て！」

二射目の弓も目標を正確に射抜くが、喜んでいる場合ではない。背後から続々と亜竜が姿を現す。数える間もなく先頭の亜竜の口から炎が放出される。その炎が長大な剣となり、後退を始めた騎士たちの盾や髪を焦がす。逃げ遅れた一人は全身を炎で包まれる。

「何体いやがるんだ！畜生！射程が長い。息が止んだら、長槍投擲！」自ら緑の光を発したブレアスは長槍に光を移し渾身の力で投げつけた。他の2人騎士も微弱な光をまとい投げつけた。炎の息の間隙を縫った投槍は過たず先頭の亜竜の頭と胴の間の急所に向かっていった。刹那、亜竜は胴より長い尾を軽やかに振るい、近づくと槍を薙ぎ払う。緑色の一本はそれをくぐり抜け、亜竜の急所に刺さる。竜の首の正面の皮は他の部分に比して薄い。突きささった槍から光が解放される。変化は数瞬後に現れた。全身が痙攣したように震え

四肢が崩れ地に伏す。

「隊長、殊勲ですね。」騎士たちは活気づくが当のブレアスは苦い表情を浮かべる。

「たった一体で浮かれているらねん！他の奴らがまともに動けるようになったら、俺たちはおろか

、この町の民も全滅だぞ。残りの矢で確実に奴らを仕留める！お前ら分かったな。」

（修行不足だぜ。今で光を使いきっちゃった！ホーク様、早く来て下さい！）彼の心の叫びを裏切るように後続の亜竜は行動不能となった仲間を踏み越えてゆっくりと前進し始めた。石畳はびくともしないが、石に当たって鳴る爪の音は騎士たちの氣勢を徐々に殺ぐ。亜竜の息を逃れるために後退を余儀なくされるが、これ以上下がると駐屯地から市街の道に出してしまう。

「騎士道……か。無理と分かっても逃げる事はできないな。弓兵、掃射用意！残りは全員抜刀！」覚悟をきめたブレアスは残りの気力を振り絞り緑の光をまとう。他の4人も微かな光をまとう。

「準備出来たな！一体でも多く仕留めよ！そして生き残れ！」自ら剣身を下にさげたまま亜竜に突進する。後続の騎士たちを引き離し口を開いた亜竜に斬りかかる。炎を発する直前、下から上に振り上げられたブレアスの刀身は光の軌跡を残し、亜竜の首もとを切り裂く。振り抜いた剣を瞬時に逆手に持ち、両手に渾身の光を湛え亜竜の口中に突き刺す。

「一体、仕留めた……」荒々しく息を吐くブレアス。その一瞬の間隙をついて背後にいた亜竜の前肢がブレアスを襲う。振り下ろされる鋭いかぎ爪を避けきれないと判断したブレアスは剣を放し、背面に体を傾けた。かぎ爪はブレアスの左頬を掠り胸甲を袈裟懸けに裂いて石畳を叩く。鮮血が迸るが、ブレアスの意識は研ぎ澄まされる。右に横転し、噛みつこうとする亜竜のアギトから逃れる。彼の目は翼をひろげた一体の亜竜をとらえる。また、彼の後に続いた騎士たちが亜竜に薙ぎ払われ、地に弾き飛ばされた鈍い音を聞く。

「畜生、上に行かれたら手出し出来ん。」体の中心から絞り出した目映い光をまとい、自らに凶刃をむけた亜竜に懐剣を投げつける。

「3体仕留めた。信じらんねえ。もう動けねえよ。」目を閉じたブレアスの耳に蹄鉄の音が響く。音の方に首を捻ると苦痛や不安が引いていく。

「いや、お前にしては上等だ！成長したもんだな。」一番聞きたかった声を聞き、ブレアスは安堵の息を吐き出す。

「あとは頼みます。空の奴は……」言い淀むブレアスは信じられない音を聞き、我が耳を疑う。地響きを体感し、確信した。

「亜竜が落ちた！」

「そう、上の奴は心配すんな。」言葉を残してホークは二振りの剣を抜きライオットを駆けさせる。視線をさらに横に移すと、昨日の少年が赤光をまとい大剣を軽々しく振るい俊足で踏み込む姿が見える。

「あの色男殿は……」ブレアスの意識は限界を迎えた。

(7)

二人の騎士の動きは地に伏したストラウス騎士たちの想像を超えていた。軽やかに動き始めた亜竜の動きを上回るスピードで剣を繰り出す騎士たち。二振りの剣を振るう壮年の騎士は海よりも深い青光を放ち、大剣を軽やかに振るう少年は燃え上がる炎の如き紅光を発している。炎の息を寸出でかわす彼らが繰り出す斬撃。刀身の切れ味はもとより爆発的な破壊力を秘めており、ものの数分で4体の亜竜が地に伏す。地上での戦いの不利を挽回すべく、翼を拡げた亜竜は一扇ぎ

で巨体を軽々と宙に浮かべる。地に伏した騎士たちの視線も空に移る。その視野に信じられないものが映る。

「人が宙にいる！」晴天の空よりも鮮やかな蒼光をまとう長身の青年は異様に長い長剣を手にして宙に浮かんでいる。

「奴がいる！どこだ！」宙にある騎士、シェフィール。彼には怯えの色など微塵もない。手にした剣を振りかざすと同時に暴風が起こり、浮かび上がった亜竜を地に叩きつけた。地に伏した騎士たちは突風の煽りを全身に受ける。啞然とした彼らの前に暴風の主が音も立てず着地した。

「みなさん、大丈夫ですか。」暢気な声に、騎士たちは返す言葉を出せなかった。

「ホーク、後は任せましたよ。」

「ああ。任せておけ！」墜ちた一体に過たず止めを刺すホーク。この異常事態に当惑しつつも冷静に次の亜竜に剣を向ける。

「師匠！これって！」シェフィールに駆け寄るショウンの顔は二日酔いのつらさと緊張の色を同居させていた。

「うん、当たりだ！亜竜が十体。昨日の死体が十体。亜竜は彼ら！彼らを変えたのは、奴だ。間違いなくいる！油断するな！」亜竜を容易く仕留めた彼らが警戒する存在とは。起きあがった騎士たちにも緊張が走る。シェフィールの研ぎ澄まされた感覚が、それを捉えた。

「ホーク、後ろ。」最後の一体を仕留めたホークの背後の空間が歪んでいる。

「おう！」素速くライオットを駆けさせるホーク。彼もただならぬ気配を感じ、シェフィールの声と同時に動いていた。彼のいた場所に歪んだ空間から長剣が繰り出された。むなしく宙を斬った剣の持ち主が姿を現す。黒衣の騎士。異様に痩せた長身の持ち主。その肌は冬日の雪の様に青白い。

「さすが守護騎士。それに風使いと火焰。俺一人では手に余る。公子はいない。いかんともし難いな。どうする……」鋭いあごに左手を当て考え込むのは芝居がかっている。

「……あなたの顔、覚えています。名を知りたい、ディクトール。」シェフィールは一気に間合いを詰め、長剣を向ける。一瞬驚いた表情を浮かべるが、すぐに酷薄な笑みを浮かべる。

「俺は覚えていないが……そうか、スヴァンを倒したのは貴様か！」血よりも濃い紅眼に危険な色加わる。右手の長剣をもてあましながら、シェフィールの方に歩みよる。

「スヴァンを倒したのは我が主君！ユムスを侮るな。この地に争乱をもたらすならば、ここで斬り捨てる。さあ、手合い願おう。ショウン、ホーク、手出し無用で。」二人を制し、クライスの剣を抜くシェフィール。遠巻きにしている騎士たちの目には本当に手合いをするのかというほど力が抜けているように見える。ショウンは速やかに剣を引き、それにならいホークも剣を鞘に戻しライオットから下りた。

「では参る！」右手の剣を左手に持ち替えた途端、刃が生き物のように伸びてくる。足捌きも見えない黒衣の騎士の動き。その刃を見切り最少の動きでかわすシェフィール。7回の必殺の斬撃を流した後、クライスの剣の光が増す。前触れもなく繰り出された横一文字の斬撃。その衝撃で黒衣の騎士が握る長剣は真っ二つに折れ、切っ先を逃れるために黒衣の騎士は後方へ自ら飛び退く。一瞬遅れれば自らの頭と胴が切り離されていたと悟り、折れた剣を放り投げる。

「首の皮一枚で済んでよかった。我が名はヴァレス。この場は退こう。我らが大望を叶えるまで

は死ねぬ。守護騎士よ。近いうちにまた見えよう！」言葉とともにヴァレスは忽然と姿を消した。

(8)

「父様。どこ？」目覚めたサーフは周りを見渡すが、いるはずの大人二人と少年一人の姿が見えない。急いで服を着て部屋中を探す。テーブルの上に書き置きがある。

「ええっと、[稽古に行く。帰ってくるまで部屋から出るな！……]酷いよ……」急いで服を着て剣を抜く。ホークと一緒にあってからは自分の身の回りの事は自分でするように言いつけられていて、それを忠実に守っている。

「あ、顔を洗ってお祈りもしなくちゃいけないんだ！」部屋の入り口の水の盥の水をすくい顔に当てると獣の叫び声と人々の騒ぎ声が頭に響く。

「え？何？」水滴を拭き取る事も忘れ困り顔になる。これがはじめての事ではないが、獣の叫び声があまりにも恐ろしく感じられ、彼は部屋を駆けだしていた。両親を失い、保護者から離れた子供が一刻も早くホークに会いたいと思うことを誰が責められるだろうか。

竜が出たという情報はあつという間に町中が知るところとなり、さらにその竜を全て退治したという噂は娯楽に乏しい漁村に喧噪をもたらす。人々が集まる場所に自然と足を向けるサーフ。(父様たちはそこにいるに違いない。)うれしさに顔がほころぶ。大人の中に彼がまぎれているが、端から見ると剣を抜いた子供は目立つ。彼自身、そのことを認識していなかった。

「ウォ・ラグレス(竜討士)だ！」子供の声が遠くから聞こえてくる。サーフは笑顔で駆け出す。大人にぶつかりながらも先へ先へと擦り抜ける。

「あの3人がほとんどの竜を倒したんだとさ。この町に駐屯していたほれ、あの隊長さんも2体倒したんだと。」

「ほんとに騎士様は凄いんだわね。」

(竜を退治したんだ。あの叫び声は竜のものだった！どうして竜がこんな町に出てきたのかな？父様は竜はめったに姿を見せないって言ったのに……)サーフの目に肩を叩きながら笑いあっているショウンとシェフィールが映る。

「おじちゃん、おにいちゃん。」大声で叫び、駆け寄るサーフ。声に気付いた二人ははっとする。

「なんでここにきたの。サーフ。」ショウンが駆け寄った。シェフィールの顔が険しくなった。と同時にショウンとサーフの間に忽然とそれは現れた。

「お前は！」ショウンが大剣を鞘走らせるが、遅かった。彼、ヴァレスの右手がサーフを抱え上げた。彼はこの時を狙っていたのだろう。

「おじちゃん、誰？」きょとんとしたサーフはヴァレスの瞳を見て全身が震えた。しかし勇気を振り絞り言葉を出した。

「離してよ。父様のところへ行くんだから。」険しかった赤い瞳が笑いを浮かべるが、抱きかかえた手を緩める事はなかった。ショウンは構えた大剣を下げざるを得なかった。あと5m先にいる狂気の騎士はショウンが赤紅を放射したならば躊躇わずサーフの首を折るだろう。

「狙っていたのか！」

「そうだ。貴様達と一緒にいなかったのが誤算だった。まあ、こうしてのこのこやってきたんだ。大漁というところだ。坊や、ケントゥリアスの涙を持っているね。」

「おじちゃん、悪い人だね。母様と約束したんだ。涙は絶対に悪い人に渡しちゃいけないって。」ヴァレスを睨みつけるサーフ。（怖がってはいけない。泣いちゃいけない。）

「ほう、生意気な口をきくものだ。が、やはり子供だ。持っている事がわかった。そこだな。」首下を握っていた左手がサーフの首に下げられた紐を引っ張りだした。その先には大粒の真珠に似た七色の玉が結びつけられている。

「これだ。これさえ手に入ればもう用はない。」ヴァレスはサーフの体を地に放り投げる。ショウンの目の前に叩きつけられたサーフ。ショウンが駆け寄るが、それよりも早くサーフが起き上がりヴァレスを睨みつける。

「返して！」怒りをみせるサーフの体から金色の光が立ち上る。ショウンは驚きを隠せない。「これが何か分かっているのか？お前のような子供がもつものではないぞ！」奪い取った首飾りを自らの首に下げ、スペルを発動させる。その一瞬に凄まじい風の矢がヴァレスに衝突する。風に圧され、よろめいたヴァレス。彼は違和感を感じていた。体が重く、思うとおりに動けない。胸に下げられた玉が目映く発光している。

「風使い、貴様か！」眼前に迫ったシェフィールに憎悪の表情を向けるヴァレス。

「そんなに衝撃があったとは思わないが。」

「そうか、泪のせいかな！」初めて驚愕の色を見せるヴァレス。

「正当な所有者から離れれば拒絶反応を示すのは道理！」遅参したホークはサーフを睨みつけてからヴァレスに向かってゆっくりと歩み寄る。

「泪はその小僧を主と認めたのか。」

「スペルを唱えられない。そうだろう？今の状態では逃げられない事は分かるだろう。泪を返せ。」ホークの全身が炎と見まごう青い光に包まれている。ホークの剣がヴァレスの首筋にのびる。紐が切断され、ケントゥリアスの泪が地に落ちる。

不快な脂汗を流していたヴァレスは自由になった瞬間に異形と化した。シェフィールとショウンを除くすべての人々はその姿に恐怖した。

見開かれた血色の瞳。必要以上にやせ細りつつも巨きくなった体躯と四肢。尻の辺りから生えだした尻尾。誰もが見たこともないその姿に言葉を呑み込む。危険を感じたホークはとどめを刺せず、後方へ跳躍する。ヴァレスは地に落ちた泪から遠ざかり、早口にスペルを唱える。

「やっと本性をみせたな！」シェフィールはホークに代わり斬撃をヴァレスに浴びせかける。クライスの剣から放たれた風がヴァレスを包み込んだように見えた瞬間、ヴァレスの軀は消えていた。

「やったのか？」後ろからホークの声が聞こえるがシェフィールは無言で虚空を見るだけであった。

記録が残るよりも昔、この大陸では海で荒れ狂うケントゥリアスに生け贄が捧げられていた。生け贄となるのは婚前の美しい娘。彼女たちはケントゥリアスに認知されることもなく無駄に命

を落としていた。ある時、生け贄の姉にあたる娘は代々受け継いできた水の巫女の役目を捨て、復讐を果たすべく単身舟を漕ぎ、ケントゥリアスに遭遇した。ここで奇妙なことが起こった。ケントゥリアスの荒ぶる気性が一変し、その娘を孤島に置きその生活を見守った。娘の消息を聞いた両親はケントゥリアスの目を盗み、島に赴いた。娘を連れ帰ろうとしたが、頑なに拒否され途方にくれる中、島に若い男が現れた。娘はその男をケントゥリアスと呼び、離れようとはしなかった。娘の両親はケントゥリアスと呼ばれる若者に娘を託し、帰路につく。「娘達の命を無駄に落とすことはこれを限りに……」という若者の言葉を携えて。

時は流れ、両親のもとに娘は帰ってきた。幼子を伴って。その幼子の小さな手には小さな七色に光る玉が握られていた。「ケントゥリアスの泪」はこうしてカウルという家の宝となり、「水の精霊ウォルタークの角」とともに神器とされた。これ以降、カウルの家に生まれる女子はこれまで失われた命の代わりに人生の半分をケントゥリアスへの祈りに捧げることになった。